

『猶太人の浮世』から『憂患余生』へ
—語彙の選択から見る近代日中間の「重訳」—

呉 燕

(中国暨南大学中国言語文学研究科)

This paper selects Futabatei Shimei's 『猶太人の浮世』, the first Japanese translation of Russian writer Maxim Gorky (ГОРЬКИЙ Максим) 's short story Каин и Артем (Cain and Artyem) , and Wu Tao's 『憂患余生』, a Chinese retranslation based on the Japanese version. It attempts to compare the different translation strategies they apply when choosing Kanji characters to express a foreign concept originally expressed in alphabetic words. It concludes that Futabatei Shimei chooses words purposefully to express his comprehensive understanding of the original work. On the other hand, Wu Tao, Futabatei's Chinese translator only has a vague understanding towards this Jewish story conveyed by Japanese texts. So he mainly chose words that are either the same or close to the Kanji words in Japanese text, not considering much about the integrity or the aesthetic needs of the story as a whole.

1. はじめに

二十世紀初頭、ヨーロッパ語圏の文学作品が二つの経路を通して清末中国に輸入された。一つ目は原語から直接中国語へ翻訳されたもの、二つ目は日本語の訳本を通して「重訳」されたものである。1895年、日清戦争の影響で、清国が初めて日本に留学生を派遣した。その数が1907年にピークに達し、その後は下がる一方だった。上述した「重訳」という翻訳の経路が盛んに利用されていた時期が、ちょうどこの時期と重なっているのは何の不思議でもないであろう。

清末中国と明治日本との間に行われた「重訳」という行いについては、既に多くの研究者が様々な角度から触れていたが、文学テキストを中心にした論述はまだ不十分である。ことに、これらの翻訳作品の表現様式として定着した「言文一致」の文体と、総ルビ付きの表記形式とがもたらした漢字語の転換作業を視野に入れ、その特定の時期に行われた「重訳」という行為に秘められている意義と可能性とについての論考したものはほとんど見当たらない。

WU, Yan. From " 'Yudayajin no Ukiyo' To 'You Huan Yu Sheng'," *Interpreting and Translation Studies*, No.13, 2013. Pages 63-78. ©by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies

1905年、二葉亭四迷の『猶太人の浮世』が日本の雑誌『太陽』に掲載され、二年後の1907年には、二葉亭の訳本に基づいた呉禱の『憂患余生』が上海『東方雑誌』に連載された。本稿では、この二つの作品を一つの「重訳」の例証として取り上げ、以上のような文脈の中で検証してみたい。それは、この二つのテキストから小説の価値設定と小説のテーマとにそれぞれ繋がっている二つのキーワードを抽出し、日本語底本の語彙の選び方と、それに対応する漢訳本の選語法を照らし合わせて検討することによって、二葉亭四迷の翻訳から呉禱の「重訳」への近代における日中間「翻訳」の一つの様態を語彙のレベルにおいて検証しようとする。

周知の通り、二葉亭は明治期の代表的な文学者であり、翻訳を通じて自分なりの文体を練り上げて日本の近代文学に深い影響を及ぼした翻訳家でもある。彼は、「原文の詩想」を再現するという翻訳の執念を果たすため、原文のレイアウトを句読点まで忠実に写すなどの様々な工夫をしていることはよく知られている。しかし、本稿で注目したいのは、彼の翻訳文体ではなく、語彙レベルに行われた表音文字の表記形式(ロシア語)から表意(漢字語語形)と表音(ルビ)とを併用した表記形式への転換過程である。明治総ルビ時代の翻訳者たちは、実は漢字語の語形表現とルビ付きとの二つの言語のレベルで翻訳を行っていた。原文の語彙を一つの漢字語に訳して相応しいルビを選択してつける場合もあるし、逆にルビを意味の拠点として漢語表現を選択する場合も時々見受けられる。明治時代の文体と表記形式は、実際に翻訳するにあたって他の言語よりも倍以上の意味空間をもたらしたところに特徴がある。本稿では、『猶太人の浮世』という例証を通して、二葉亭四迷がいかに漢字語形とルビ付けという二つの表現様式を駆使して原文の語彙を翻訳したのか、特に漢字語形の選択について考察し、二葉亭氏の訳文の綴り方を明らかにしたい。

二葉亭の訳文についての論述を踏まえて、この訳文に基づいた清末の翻訳者呉禱の「重訳」について考えたい。ことに、二葉亭の訳文の中で出てくる漢語語形とルビとの重層的なテキストを呉禱が語彙のレベルでどのように「重訳」を遂げたのか、という問題をみてみたい。

2. 「赤銅色」: 小説の価値設定に関する選語法

2.1 『Каин и Артём』とユダヤ人の差別レトリック

本稿で取り上げる二葉亭の『猶太人の浮世』と呉禱の重訳本は、ロシア作家ゴーリキー(ГОРЬКИЙ Максим)の作品<Каин и Артём>(Cain and Artyom)に遡れる。1899年10月、<Каин и Артём>が彼の三つ目の短篇小説集“Очерки и рассказы (Sketches and Stories Volume III)”に収められ(F.M. Borrás, 1967: xiv)、六年後の1905年、二葉亭四迷が「長谷川二葉亭」と名乗ってロシア原文に基づいて翻訳した「猶太人の浮世」が『太陽』雑誌11巻2号と4号に連続発表された。そして、僅かに一年半を経た1907年、清末の翻訳者の呉禱が『猶太人の浮世』を底本にして重訳した「憂患余生」が当時上海で最も有名な総合雑誌『東方雑誌』4巻1-4号に連続して発表された。

この小説がロシアで発表された際、「新味がない」というような厳しい批判を招いた一方(安藤, 2000: 426)、海外でも同じような冷遇を受けたのである¹。今になってもゴーリキーを取り扱っ

た研究には、『カインとアルテム』という小説を中心に論ずるものは滅多にない(Bowen,1950: 153; Barratt,1993: 48)²。この小説は、ゴーリキーの初期作品の文学的な価値が高いという定評に反し、軽視されがちになり続ける理由は、ユダヤ人に関するテーマに関わっていると思われる。

小説の筋をまとめると次のようになる:ヴォルガ中流域にあるシハンという町で、小金貸しと雑貨商いとを生業としているユダヤ人カインが、人々に嘲られたり虐められたりしてばかりの惨めな日々を送っている。ある日、町一番の美男子で腕っぶりも強いアルテムが、町のならず者の計略にかかってひどく殴られた。そのためアルテムは、半死半生の状態に陥るが、それをカインが助けたことから、二人の関係が一変する。アルテムは自分から申し出て、完全に回復してから暫くの間カインの保護者となった。しかしながら、野獣のようなアルテムはカインをかばうことに対してすぐに嫌気がさしたため、ある日の夕暮れ、カインを川沿いの芝生に呼び出して、自分はこれから二度とカインを優遇しない、と宣言した。小説はカインとアルテムとの間に行われたこの対話で終わりを迎える。

ゴーリキーは彼の世代における代表的な親ユダヤ知識人として知られた(赤尾,2007: 46-47)³。しかしながら、このゴーリキーは、『カインとアルテム』以外にユダヤ人を扱った作品をほとんど書いていないにも関わらず、この小説における主人公である猶太人カインのイメージにさえ、読者の嫌悪感をくすぐるところがはっきり存在している。

レオネイト・リブアクは、ロシア文学におけるユダヤ人の表象に関する著作の中で、「アロセミチズム(allosemitism)」という概念を提示し、「ユダヤ人は他の人たちとの間にかなり大きな差異が存在するという暗黙の前提を合法化しつつ異なる概念を作って、それをユダヤ人に当てはめることによってユダヤ人にだけ当てはまる一つのディスクールが作り上げられる」(Livak, 2010:10)、という言説現象を指摘している。彼によれば、第二次世界大戦が始まるまでに、非ユダヤ人のヨーロッパ人作家達は、政治的には親ユダヤにせよ反ユダヤにせよ、文学作品で「ユダヤ人」を描くとき、必ず「アロセミチズム」というディスクールの陥穽に陥る。作中でユダヤ人に対して同情と憎悪とのどちらを示すかに関わらず、作家の中ですでに「the jews」を表現する主体意識が明確であるため、「猶太人」という語彙ラベルによって彼らの言語表現が括り付けられてしまうからに他ならない。

それゆえ、リブアクは、ロシア文学におけるユダヤ人の表象は、必ずしもその時代のユダヤ人の現実の境遇にぴったり合致するともいえず、むしろ文学表象としてのユダヤ人は、ある独特な生成モデル(generative model)に従って同じようなテキストを延々に再生産してゆくこと述べる。また、この生成モデルの支配によって、ユダヤ人のイメージには、ある共通の特徴が見られるとする。例えば、ユダヤ人はよく宗教的なもしくは社会的な崖っぷちをさまよう人として表現され(op.cit.: 20)、罪や苦痛や軟弱さなど、人間の様々なネガティブな心理を具象化させるスケープゴート・イメージとして呈示される(op.cit.: 30)。また、キリスト教におけるイエスの対立像として位置づけられ、ユダヤ教の父としての神のイメージに基づいて創出される年配の男性像もユダヤ人の文学コードの中で欠かせない表現法の一つである(op.cit.: 31)。

そして、これらの特徴のいずれもが、ゴリーキーの描き出したカインのイメージに見つけることができる。平たく言えば、カインというイメージは、ユダヤ人に関する生成モデルに存するあらゆる特徴を備えて、一個のユダヤ人の標準像として成り立ったのである。ゴリーキーは、ユダヤ人に同情の眼差しを向け、彼らの境遇を描き出そうとしていたが、むしろ読者の持つユダヤ人への差別感と嫌悪感とを強く刺激することになった。

小説の冒頭部にある主人公のユダヤ人カインに関する外見描写は、ユダヤ人の生成モデルによって生み出された最も典型的なバージョンであると言っても差し支えない。現実の境遇で親ユダヤの立場に立っているゴリーキーに、小説の創作にあたって、伝統的な「ユダヤ人」の生成モデルから脱出して他の表現法を見出せない窮境に切羽詰った様子を窺える。

<Каин и Артём>(Cain and Artyom)という小説の冒頭部にある主人公ユダヤ人カインの外見描写は、上述の生成モデルに従って成り立ったものであるとも言えよう。就中「赤銅色」という一語の使い方には、興味深い点が隠れているので、その語を巡って二葉亭の訳本と吳禱の重訳本とそれぞれの翻訳法を検証してみよう。

<p>ゴリーキー 原作</p>	<p>Каин был маленький юркий еврей, с острой головой, с жёлтым худым лицом; на скулах и подбородке у него росли кустики рыжих жёстких волос, и лицо смотрело из них точно из старой, растрёпанной плюшевой рамки, верхней частью которой служил козырёк грязного картуза.</p>
<p>二葉亭 訳本</p>	<p>カインは窄頭の、頬の瘦削けた、赤銅色の、矮小な、進退の敏捷い猶太人である。頬にも鬚にも鬚々と生えた、赤毛の剛い鬚髯の中から顔を出してある所は、纏れた古フラスコの中の枠の中から竊と浮世を覗いてある繪像、ト見立てれば、彼の薄汚れた帽子の眉庇は差詰め其額縁の天にならうといふもの。</p> <p>その眉庇の下、矢張赤ちやけた、宛も筆つた如き眉毛の下に、灰色の眼が子然と光つてある。抑も此眼は、永く一物の上に留まることは稀で、絶えず恂々と四方に馳せ、物に怖た如く媚ぶるが如き微笑の色を、嫌はずに振撒く。</p> <p>此微笑を見た者は誰も然う思ふ、こんな笑顔をする者に限つて、何につけても先づ恂つく、それが些かの機にも直ぐと昂じて戦々となる。</p>
<p>吳禱訳本</p>	<p>加英者。乃是尖頭削臉。紅銅色。矮小。進退飄忽。行動敏捷的猶太人。那滿面鬚鬚。連腮上頰上。也長得鬚鬚地。從那紅毛剛鬚公鬚髯之中。露出那張臉來。好似中國鄉間俗子家裏。掛著鍾馗進士的繪像一般。那污穢的帽子前緣遮陽。竟把他額角的半月天。遮住不見。</p> <p>遮陽之下。也是紅色宛如毛刷的眉毛。灰色的眼睛裏。灼灼然放出光耀。這雙眼睛。向不停留在一件東西之上。却儘著不斷的轉掉四方。又常常顯出微笑形容。既如恐怖。又如嫵媚。向人前扭捏。</p>

	大凡見他微笑的人。箇箇都要猜疑奇怪。道他胸中不知藏著什麼變詐機鋒。那笑風所到之處。就是刀鋒劍鋒所到之處。常言道笑裡藏刀。笑面老虎。正是這般形狀。
--	--

上記の四つのテキストを参照するとわかるように、ゴークー原文の「рыжих жёстких」が、英訳では「red hair」、日本語訳では「赤毛」、中国語訳では「紅毛」にそれぞれ翻訳されている。興味深いのは、二葉亭訳の中には、これに加えてもう一つ「赤」に関わった語彙「赤銅色」という独立修飾語が存在することである。呉禱はそれを「紅銅色」と訳している。しかし、ゴークーの原作でその語に該当する箇所は「сжёлтым худым лицом」であり、英訳本はそれを「a lean and sallow face」と訳している。これを直訳すると、「やつれて黄ばんだ顔」となる。明治三十六年に出版された『露和字彙』を引くと、Жёлтый の見出しに和文解釈が「黄ナル、黄色」と書かれている。そうすると、なぜ二葉亭は Жёлтый を「赤銅色の」と翻訳したのか、またわざわざこの一つのフレーズを二つに分けて「赤銅色の、矮小な」と、「赤銅色」を顔ではなくユダヤ人に係る語としたのか、つまりなぜ「赤銅色」をユダヤ人のイメージを総括する独立修飾語として位置付けたのか、ということを検討する必要がでてくる。

「赤銅色」について、『日本国語大辞典(第二版)』の見出しに「赤銅のような紫を帯びた光沢のある黒色。赤銅。あかがねいろ」⁴とある。そしてそこで挙げられた明治時代の用例を見ると、人の日に焼けた肌色を描く時にしばしば使われており、体力労働者のイメージ、或いは健康的なイメージに繋がっていることが窺える。

- * 暑中休暇[1892]〈巖谷小波〉一「赤銅色(シヤクドウイロ)の脛無遠慮に現はし」
- * 菊池君[1908]〈石川啄木〉二「志田君は、首から赤銅色になった酔顔を突出して笑った
- * 良人の自白[1904~06]〈木下尚江〉後・二五・七「脂を落した赤銅の肉は、新らしき水気を含んで」(ibid.)

「赤銅色」はもともと「光沢のある黒色」のような金属色を指したため(Ibid.)、人の日焼けした肌の色を表現するものとしてそれほど不自然ではない。ただし「赤銅色」は「あかがねいろ」という意味を持つ。それは、確かに「黄色」の滲んでいる金属色であり、どちらかといえばむしろ人參色に近い色である。中国語と照らし合わせると、「赤銅色」は人の肌色を描く際には「古銅色」と訳されるほうがよいし、金属の色を表現する際には「紅銅色」として訳するのが適当であろう。

二葉亭はこのような「赤銅色」の微妙な意義のずれを目的としてこの表記形式を選んだのであろう。カインの「血色が悪いやつれた」顔を描き出すためには、やはり「あかがねいろ」を念頭に置かなければならない。「赤銅色」という語彙を選ぶことによって、その色合いを巧く表現できた一方、そこには、この語彙にもともと内包されている日焼けした黒い肌色という印象も自然に挿入されて、ユダヤ人に対するイメージを中立化させる役割も果たした。

このような「赤銅色」という語の選択がユダヤ人に対するイメージを中立化させる役割を持つ

ことは、それが独立修飾語として位置づけられていることにも関わっている。明治三十一年『国民の友』雑誌で掲載された二葉亭の翻訳作品『猶太人』の冒頭部に、ある猶太人の外見が次のように描写されている。

こいつ うるさよう き く やつ さげ くひもの も く
 此奴は蒼蠅用を聞きに来る奴で、酒だの、食物だの、といふやうなものを持つて来るのだ。
 せ ひく やせ あばた にんじんみ いろ やつ ちひ やつばりにんじんいろ め
 背の低い、瘦た、痘痕のある胡蘿蔔見たやうな色の奴で、小さな、矢張胡蘿蔔色の眼を
 うるさく たか はし まが はな しじゅうせき し
 蒼蠅ぼち～やらせて、高い、端の曲つた鼻をして、始終咳ばつかり仕てゐるのだ。⁵

ロシア語には、いずれも英語で red と訳することのできる красный と рыжий という二つの形容詞があるが、рыжий は人の髪の色を指す時、特にユダヤ人の髪色を指すときの専用語として使われる。赤と金色とを混色してできあがるのは рыжий であって、完全な「赤」とは全く別なものである。明治三十六年に出版された『露和字彙』によれば、「рыжий」は「人参色」に対応している(古川, 1903: 967)。原文で使われたのは красный でなく рыжий であるため⁶、二葉亭は自分の翻訳作品で丁寧に辞書に従って訳したというわけである。というのは、ロシア語原文にこだわりがある二葉亭の「胡蘿蔔見たやうな色」は、最も原文の表現に近い表現法であると思われるからである。

もう一つ注意すべきところは、рыжий という語彙は、「人参色」と「人参色の毛」あるいは「赤毛」という二つの意味を持っている。原文の文脈から見れば、一つの独立した修飾語として文の中で位置づけられるため、英訳のように「red-haired」と訳しても、二葉亭のように「胡蘿蔔見たやうな色」と訳しても、差し支えない。さらに、二葉亭の工夫は、「にんじん」に「胡蘿蔔」という漢字表記を選んだところにも見出される。

というのは、作中の人物のユダヤ人に対する嫌悪の口調を巧みに再現するため、読者にインパクトを与える誇張した言い方を探り、「胡蘿蔔」という漢字表記の活用に至ったと考えられるからだ。「рыжий」は「赤毛」と訳される代わりに「胡蘿蔔見たやうな色」と訳された。それによってこの語はユダヤ人のイメージを総括する力を持つようになる。さらに、通常の表記形式である「人参色」を避け、わざわざ「胡蘿蔔色」といったような漢字表記を選んだことで、直後の「蒼蠅」といった表記形式との間にも何らかの呼応関係を示唆しながら、「猶太人＝蒼蠅みたいな卑しいもの」という一つの文脈的な関連性を持つ語彙パターンが二葉亭の認識の枠組みとして成立することになる。

ここから『猶太人の浮世』における「赤銅色」のユダヤ人という誤訳の発想が生じると思われる。なぜなら、二葉亭はツルゲーネフの原文にある表現法をそのままゴーリキーの翻訳作品に移してきたからである。ゴーリキーの原文をよく見ればわかるように、カインに対する修飾語の中で「рыжий」のような独立した形容詞はどこにも見つからず、あるのは単に волос (hair) と結びついている形容詞 рыжих であるため、二葉亭の「赤銅色の、」という訳し方は明らかにツルゲーネフの表現法から借用してきたものであると思われる。ここからは、ただ、昔の翻訳作業を

通して抱いたユダヤ人について印象はなかなか取り払いきれないということが証明できる一方、今回は、「胡蘿蔔色」の代わりに人の肌色を指す「赤銅色」という表記形式が選ばれたという点からは、ユダヤ人を忌み嫌って物扱いにするレトリックを意識的に避けようとする意図も窺われよう。

なぜかという、ツルゲーネフの『猶太人』とは、主要人物であるユダヤ人に対して、差別的なニュアンスに溢れたレトリックをふんだんに用いる特徴を持つ作品である。たとえば、その作品の標題では普通の еврей でなく Жид という語を用いているが、これは英語の sheeny に相当するユダヤ人に対する差別表現であり、作品自体の持つユダヤ人を軽蔑する趣旨がここからもあらわになっている。だが、それに対して、ゴーリキーは彼の世代における代表的な親ユダヤ知識人として知られており(赤尾, loc.cit.)、この小説にはユダヤ人に対して同情的な態度もレトリックで伝わってくる。二葉亭は、それを了承した上で、言葉遣いに注意を払ったのであろう。二葉亭は『猶太人の浮世』でも「人參色」という表記形式を一箇所用いている。しかしながら、それは、カインを指す際ではなく、町のならず者の一人である「婿さん」と名乗る者を指す際に使われた。

人參色の、髭だらけな婿さんの面は、驚愕と忌々しいとで此處一寸の間鈍い面になったが、⁷

原文における同じ字を表現対象によって訳し分けられるという翻訳方針を通して、訳者は読者としての自分の立場と態度とを訳文に混入させてあらわにしていた。「赤銅色」は明治期の文脈では、外国人の肌色を指すことが多く、体力労働者の日に焼けた肌色を描く時にもよく使われた。「人參色」という語彙と比べると、価値中立的な印象を持つ語彙である。この一言が、カインが物扱いにされた地位から人間として扱われる地位へと引き揚げる役割を果たしたのは確かである。

2.2 「鍾馗」のようなユダヤ人：呉禱の誤訳

呉禱の訳で特に目を引くのは、やはり猶太人を「鍾馗」に見立てるという「誤訳」だろう。陳建華『20世紀中俄文学関係』はこの一節を引き合いにして呉禱の翻訳法の随意性と未熟さを傍証しようとする。

しかし、馬君武にせよ呉禱にせよ多かれ少なかれ当時の翻訳方法の影響を受けており、原作を書き換えあるいは手を加えることがとても多く、ある翻訳はほとんど翻案したものである。例えば、呉禱が訳したゴーリキー「憂患余生」の冒頭には、人物の容貌について描写をしたあと、次のような文章が出てくる。「まるで中国の田舎の家庭にかかっている鍾馗さまの絵図のようである」というところからその随意性を窺うことができるのだ。(陳建華, 1998: 46-47)⁸

実は、このような連想は、日本語訳本の漢文脈の意味空間のみに寄り添った結果辿り着いたものである。前に引用した部分の漢字数は56個であるが、呉禱はそのうちの30個を漢語訳本にそのまま使用しており、約54%の利用率と言える。特に冒頭の二文においては、二字の漢字表記はできる限りそのまま漢語文脈に使用されている。ただし、さすがにそのまま使いがたい漢字語のみは部分的に変更され、漢語文脈に相応しい語彙に入れ替えられている。例えば、「窄頭」→「尖頭」、「赤銅色」→「紅銅色」、「鬚髯」→「鬚鬚」である。

呉禱が用いた、日本語文脈における漢字語を手がかりとして改めて漢語文脈を形作ろうとする際のもう一つの手立ては、漢字語の語順を漢語の文法的な構造に従って調整する一方、漢語文脈における定型句に沿って漢字語の間に語彙を埋めていくものである。例えば、「進退の敏捷」は、「進退飄忽」「行動敏捷」という二つの定型表現によって翻訳される。ところが、「進退飄忽」の「飄忽」は、漢語の文脈においては雲や風の軽やかに流れる形態を指すことが多く、例えば異界に暮らしている仙人たちを描写する時によく用いられるため、普通の人間の動きや仕草を形容すると、何やら不思議な感じが漂ってくる。この「飄忽」はもともと「進退」という語彙からの連想のために出来上がった語であり原文には全く存在しないイメージである。

「赤銅色」かつ「進退飄忽」、そこから初めて呉禱は「鍾馗」のイメージを思いついたのだろう。鍾馗とは、中国道教信仰における魔よけの神である。「唐逸史」によれば、唐の玄宗皇帝が病に罹った時、鍾馗が悪鬼を退治する夢を見、目を覚ますと病気が治ったため、絵師呉道子に鍾馗の絵を描かせて礼拝し始めたという。いまだに中国では鍾馗を描いた絵を随所で見かけられるが、それは必ず伝統の中国の赤い官服を身に包み、長い髭を蓄え、大きな目で何かをにらみつけている姿で描かれている。

呉禱は、できる限り日本語訳の文型を漢語の文脈に転写しようとしたため、「赤銅色の、」は「紅銅色。」のような形で文脈に収められ、「猶太人」の文法的な独立修飾語として位置づけられた。これに加えて、後の「赤毛の剛鬚鬚」という表現は鍾馗のイメージの定着に力を添えた。ことに「剛鬚」の「剛」は、「赤銅色」の「銅」と同じく金属の質感を連想させる性質を持っており、呉禱はそれを感じた上で「紅毛剛鬚公鬚鬚」という訳文を作ったに違いない。なかんずく「鬚公」という二つの漢字は、もともと訳者の考えによって日本語文脈にある漢字語を結びつける役割のみを担わせたかったのかもしれないが、むしろ異なった文脈に感じ取られた漢字語の相互指向性によって自然に派生しているものとして捉える方が相応しいと思われる。そして、この「鬚公」から「鍾馗」の「絵像」という比喩が形成されたと考えられる。

3. 「浮世」: 小説のテーマに関する選語法

3.1 「浮世」の翻訳

二葉亭の訳には、「浮世」という言葉が多用される。「カインとアルテム」から「猶太人の浮世」へと小説を改題しただけでなく、本文においても総計八回登場している。(付記の表を参照)

まず、標題の「浮世」に眼を移そう。周知の通り、二葉亭は翻訳作品の題のつけ方に非常にこだわっていた。もっぱらそれに関して論ずる「小説の題のつけ方」という文章のうち、自作だ

けでなく、翻訳作品の題さえ付けあぐむことがよくあると告白し、「露西亜の作家の題でも、ちつともこれほど感服するのは無い」と述べる。「ツルゲーネフの作を翻訳する時には、元来が趣味の多い作だから、題もそれに匹敵したものをと思ふことがあるが、ゴルキーになつちや、内容が面白い風だから、趣味のある題なぞ却て拙い」(二葉亭, 1985: 239)⁹、とある。確かに、二葉亭が推奨する平凡かつ「俳諧趣味」(op.cit.: 238)¹⁰に富むという題の標準に見比べると、ゴーストの「カインとアルテム」という原題はずいぶん適当なものにしか見えないだろう。また二葉亭にとって翻訳作品の理想的な標題は、上記の二つの基準を満たせばよい訳ではなく、原作に秘められたよそ者の目には見つけにくい何らかの要旨を剥き出しにする役割を果たすものでなければならない。「片恋」という標題はその完璧さを誇る僅かな一例であろう。とすれば、二葉亭四迷は「猶太人の浮世」という標題を定めるために、同じように腐心したに違いない。特に「浮世」という語彙を使って、主人公たちをはじめとする貧窮のどん底に陥る人々の生き方を指し示しながら、保護者を得て燃え始める希望の頂から、はからずも絶望の淵に突き落とされる猶太人カインの人生の儚さを示唆する意図は見逃せない。

明治期最も多く使われていた国語辞書『言海』には、「うきよ」の読みに二つの項目がある。

「うきよ(名)憂世 世ノ中憂キ世ノ多キニツケテイフ語 塵世」

「うきよ(名)浮世 佛説ニ、此世ヲ、浮キテ定メナキモノトシテ、稱スル語、人ノ世ニアル間ハ、長キ夢ミルガ如シト云フ。」(大槻, 1891)¹¹

明治期においては、「憂世」はほぼ死語に近く、一方「浮世」は盛んに用いられていた¹²。『言海』の解釈から見れば、「浮世」という語は明治期の日本語において、主に「人々が生きているにぎやかな世間」と、定まらぬ運命から生じる人生の儚さとの二つの意味を含むものであった。

付記の表で示したように、「浮世」がそれぞれ「судьбой (fate)」、(例 2)、「жизни (life)」、(例 3、4、6)、「бытия (being)」、(例 5)などさまざまな語彙の訳語として用いられている。さらに、例 1 の「とをいてある」といった部分は完全な加筆であり、例 7 は原作の歌謡の内容を部分的に取り上げて創作したものである。例 2 の「浮世恨(うきよら)めしの一をす」といった表現の「浮世」も訳者自身の意思による加筆ともいえよう。原文にない語彙であるだけでなく、日本語の文脈においても特に必要のないものだからである。先述の「浮世」の語義を参照すると、二葉亭が「運命」か「生活」若しくは「世間」と訳すべき語彙を「浮世」と翻訳したのは理解できるが、「бытия (being、存在)」のような、訳語がすでに辞書において定着していた語彙(古川, op.cit.: 53)¹³までも否応なしに「浮世」と翻訳したのは、文体的な統合性を優先させようとする訳者の意識が強く働いていたからであるに違いない。

総じて言えば、二葉亭が「浮世」という一語を一つのメイン・イメージとしてこの作品の中で作用動させようとする意図を持っていたことが窺われる。彼の翻訳作品がしばしば「田舎言葉」とか、「全体の調子何となく軽浮なるが如く」といった不評を招きがちだったのは¹⁴、このような江

戸臭い語彙を多用したからであると思われるが、これは単なる翻訳の癖というだけでなく、むしろある意味で二葉亭なりの再創作の手法でもあるだろう。なぜなら、幾つかの類語を「浮世」という意味に富む一つの表記形式に集約させることによって、この語はテキストを貫くような視覚的な印象を読者に強く感じさせ、まるで作品の趣旨そのものをテキストから浮上させ、顕在化させるかのように機能する。特に「浮世」という一語は、先に触れたように、日本語の文脈において多用され、さまざまな意味とそれに相応しい感情とに結び付けられたことによって、もうすでに単純な語彙から表象的な符号に昇格されたものであった。この一語の力で、ロシアのある貧しい町のイメージに明治の日本人に馴染んでいた世間像を入り混じらせながら、「訳」と「作」との間に存在する境目をなし崩しに揺さぶっていったのである。

3.2 「浮世」に対して呉禱の処理法

ところが、二葉亭の苦心を呉禱は受け入れようとしなかったようである。彼の翻訳作品には、二葉亭の改題を「原名猶太人之浮生」という割注の形で呉禱自身が作った標題「憂患余生」の下に書き添えるだけにとどめただけでなく、本文にも「浮世」が一切使われていない。この改題自体からは、呉禱が猶太人カインの境遇に重きを置きながら、その境遇を清末中国の実情の一つのメタファーにしようとした、という翻訳の意図が窺われよう。しかし、日本語文脈における漢字をできる限り漢文訳文の中で活用していくという翻訳手法に長ける呉禱が、「浮世」の語彙に対して拒否の姿勢をとったのは、どのような理由によるものなのだろうか。

それは「浮世」という一語の表記形式とその漢語コンテキストとにおける意味のニュアンスに深く関わっていると考えられる。

『日本国語大辞典』では「ふせい」という見出しに「浮世・浮生」の二つの漢字表記が並んでいる。『言海』にも「ふせい」の見出しがあって、「ウキヨ」という解釈の上にも「浮世」の漢字が加えられている。というのは、「浮世」と「浮生」がいずれも元々中国の古語であり¹⁵、「ふせい」という音読みで漢語の語彙として日本語の文脈に繰り込まれたが¹⁶、次第に「浮世」という漢字表記を借りるようになったため、「うきよ」という和語を当てることとなり、そこで「^{うきよ}浮世」のような表記に定着したからである。

北京大学の CCL 中国語資源庫¹⁷の検索結果によれば、「古代の漢語」類の中で「浮世」に該当する用例数は 252 点に過ぎないが、そのうち仏教用語の「閻浮世」と「沉浮世間」のような二つの語彙の並立によって偶然に出来上がった 25 点を取り除くと、残りの 227 点は全て清代以前のものである。それに対し、「浮生」の用例数は漢から清にわたって 500 点に上り、清代になってもかなりの用例が見られる。「浮世」はもともと仏経における「人世」を指す「閻浮世」¹⁸ という専門用語から転用されたものであるが、時代を経てどんどん仏教的な意味が薄くなり、「浮生」という一語と代替可能な語彙となって、明代の俗語小説には二語とも非常に多く使われていたが、清代に入ると、「浮世」の代りに「浮生」の方がよく使われるようになった。語義的な面から見ると、「浮世」から「浮生」への合流は、悲しさや切なさを重んじる仏教的な人世観から、人世の楽しさや長閑さに注目し、超越的な気分で人世の全てを受け入れようとする道教的な

人世観への変貌過程として捉えることも出来よう。

以上のように、「浮世」或いは「浮生」と和語の「うきよ」との間にはもちろん、人生や世間の定まらぬはかなさを指すなど意味の上で重なるところもあったが、両者は呉構の時代の漢語文脈においてすでに全く異なる感情的な意味や連想を喚起するものであった。呉構は日本語文脈における「浮世」という漢語表記をそのまま受け止めようとしたからこそ、訳文を綴る時にこの一語によってもたらされる文脈上の不適応さを感じずにはいられなかった。彼はまず標題の「浮世」を当時漢語のコンテキストにおいてより相応しい語であった「浮生」に変換したが、「浮生」の超越感に富むニュアンスとこの作品の「憂患」感との間に齟齬を覚えたため、「浮世(うきよ)」を一つの和語として認めてそのまま漢語の文脈に取り入れようとせず、「塵世」や「人世間」といった他の語彙に変換して訳したのではないだろうか。

4. まとめ

上述のような語彙のレベルの分析を通して、明治日本と清末中国における「重訳」の様態を新たな角度から垣間見て再考することができるだろう。

二葉亭の「猶太人の浮世」で、原本のさまざまな類語を一つの語彙に集約したり、ルビの付け方と漢語の語形とを意識的に分けて、表現対象によって訳し分けたりするような翻訳方針を通して、原文の旨と価値設定とを忠実に模写する一方、総ルビという表現法の豊かさを生かして、読者としての自分の考えと認識とをテキストの上に軽く覆わせていくことができる。換言すれば次のようになる。明治総ルビ時代の翻訳者たちは、実は漢語表現とルビの振りとの二つの言語のレベルで翻訳を行っている。原文の詩想を忠実に再現する目的から言えば、他の言語より倍以上の意味空間が与えられる点においてこれは有用であるはずだ。

残念ながら、このようなテキストにより呈示する重層的意味空間は、清末の重訳者呉構にとって、なかなか受け入れ難いような気がする。上述の分析から見れば、まず言えるのは、呉構は二葉亭のように小説の全体的な価値設定と趣旨とをしっかりと把握した上で、語彙のレベル迄に工夫するという翻訳意識が欠落している。次は、彼は、日本語原文の漢語語形に強く目を引かれて、この漢字語の流れに辿りながら自分の文脈を作成する傾向を伺える。

漢字語を中心として連想作用を生かして文を綴る作業はあくまで、表記システムを相当程度に共有する枠組みにおいてしか生じえない言語間の転換作業であろう。言語システムの違いを知りつつも、表記システムの共通性にどうしても目を向けずにいられない。或いは、日本語の原本をすでに完成度の高い漢文訳本として受け入れてしまい、それに基づいて修正、或いは補足、再試行を繰り返して自分なりの文を作り上げる。このような理解を漠然と念頭に置いていたからこそ、呉構は自身が日本語から翻訳した小説に「重訳」でなく「重演」という名を付けたのではないだろうか。コンテキストから逸れた漢字語の多義性と曖昧さから生じるエクリチュールとしての「重演」については、より詳細に論じる必要があるが、それについては別稿に委ねることとする。

付表¹⁹ 「浮世」について

二葉亭訳	英訳	呉構訳	現代日本語訳 19
<p>あかげ こわ ひげ なか 【1】赤毛の剛い鬚髯の中 かほ だ とろ ほつ ら顔を出してゐる所は、縫 ふる わく なか れた古フラステンの枠の中 そつ うきよ のぞ から竊と浮世を覗いてゐる まごう み た かれ 繪像、ト見立てれば、彼の うすよご ぼうし まびさし 薄汚れた帽子の眉庇は さしづ そのがくぶら てん 差詰め其額縁の天にならう といふもの。</p>	<p>該当なし</p>	<p>該当なし</p>	<p>該当なし</p>
<p>うきよ ほきだ このまち 【2】浮世を掃出された此町 ちゆうにん このん ひと ぶじよく の任人は喜で人を侮辱す へき をり る癖があつて、機会さへあ かたし これ や れば必ず之を行ふ、といふ ま さしあた も先づ差當りかうでもしなけ うきようら ねん れば浮世恨めしの一念を はら みち 霽す道がないのである。</p>	<p>Он жил среди людей, обиженных судьбой, а для них всегда приятно обидеть ближнего, и они умеют делать это, ибо пока только так они могут мстить за себя. А обижать Каина было легко: когда над ним издевались, он только виновато улыбался и порой даже сам помогал смеяться над собой, как бы платя вперёд своим обидчикам за право существовать среди них.</p>	<p>這箇市鎮上的居民。看似脫出塵世。誰知却有歡喜侮弄他人的癖好。沒有機會便罷。倘有機會。沒有不行的。若是眼前不得些便宜。他們心裏就忽忽如有所失。</p>	<p>運命の手に虐げられてゐるこの町の人達は、好んで人を侮辱する癖をもつてゐて、機会さへあればすぐにこれをするのだつた、と云ふのも、差し當りかうでもしなければ、彼等の鬱憤をはらす道がなかつたのである。</p>
<p>うきよ おに す くま 【3】浮世に鬼の住まぬ隈は な おに かうだんし 無い。シハンの鬼は好男子 アルテムである。</p>	<p>В каждом уголке жизни есть свой деспот.</p>	<p>世間上沒有無鬼居住的處在。</p>	<p>凡そこの世に鬼のゐない場所はない。</p>
<p>ひと かうべ めぐ 【4】一たび首を回らして ゆんで みおろ まち 左手を瞰下せば、町の あとさきげざやか み 首尾顕然に見えわたつて、 うきよ にえかへ ほど 浮世はいつも沸返る程の さわ その う なか 騒ぎ、其どさくさの憂き中に みい みし すがた 視入れば、見識つた姿の あ が まは み ひとごゑ 足掻き廻るのも見え、市聲</p>	<p>А повернув голову влево, он видел свою улицу от начала до конца, в ней кипела шумная жизнь; всматриваясь в её тёмную суету, он различал фигуры знакомых людей, слышал</p>	<p>若是回頭。向左手下瞰。街道頭尾。一概看得無餘。那嘈雜熱鬧聲音。好似難民趕鬧饑荒一樣。那時他心裏不知又起什麼感情。</p>	<p>頭を左へ廻せば、騒々しい生活を載せて流れてゐる例の町が見える。注意して見れば、この大きな黒い塊の中にも、彼のよく知つてゐる男女の姿を、はつきりと、</p>

二葉亭訳	英訳	呉構訳	現代日本語訳 19
<p>がやゝ うき うつた ごと の嘈雑と飢を訴ふるが如き きこ かれ なに おも ところ も聞えて、彼は何か思ふ所 かほつき あるやうな面相になる。</p>	<p>голодный рёв и, может быть, думал о чём-нибудь.</p>		<p>見分ることも出来る。又 シハンの町のがやくと飢 えたやうな叫び聲も聞こ えて、彼は何か考へて みるやうな顔つきにな る。</p>
<p>【5】アルテムはかうしたぬれ まく だ あくるひ うきよ 幕を出した翌日は、浮世の こと れいより さら むとんちやく 事には例よりは更に無頓着 たど おむ になつて、譬へば眠れる し、 む たけ 獅子の威あつて猛からざる のっしり びなん 如く、堂々として美男が いよ〜みづきはた み 彌水際立つて見える。</p>	<p>На другой день после такой сценки Артём ещё более, чем всегда, недоступен впечатлениям бытия и ещё более красив своей редкой красотой могучего, но смирного животного.</p>	<p>該当なし</p>	<p>かうした濡場を演じた翌 日のアルテムは、外界 の凡ゆる印象に對して、 何時もより一層無頓着 になり、稀な落ちついた 動物美は、一層素晴ら しく見える。</p>
<p>【6】「……だから私ア然う おも おやかた み 思ふんだ、親方から見り あつし ほか やつら おな こと や、私も他の奴等も同じ事 あつし ほう い なんだ、私の方が好いって わけ みんな おな うきよ 譯もねえが、皆と同じ浮世 わた にんげん を渡つてる人間だから、そ ぶんぐん れで毆打なさるんだ、トかう おも おつし 思ふもんだからね、私ア いままでおやかた おつかねえ す 今迄親方ア可怖が好きだ つた。……」</p>	<p>Я тогда думал: "Вот этот сильный человек бьёт и оскорбляет меня не за то, что я жид, а за то, что я, как все они, не лучше их и среди них несу свою жизнь... "И... я всегда со страхом любил вас.</p>	<p>該当なし</p>	<p>二葉亭の訳本と同じ</p>
<p>【7】ト婿さんは匙を鳴して またうた だ おら おやち 又唱ひ出す。「己が親仁は りんじゆ とき じやくたけ 臨終の時にや、三尺高い き そら あが おら おにこ 木の空へ上た、己は鬼子 おや に き あが で親には似いて、木へは上 おつ き お らで落こちた、木から落ち さる み たる猿の身なれば、やれ〜 うきよ らく な 浮世の楽では無いぞ、お かゝどう な 嬢如何せうパンが無い。」</p>	<p>объявил Жених, стучая ложками и продолжая напевать: Ой, горько мне живётся! Плохо я удался. Тяжку с братом повесили, А я оборвался!..</p>	<p>該当なし</p>	<p>二葉亭の訳と同じ</p>

【謝辞】

本稿は、日本学術振興会の外国人特別研究員 (ID :P10307)プロジェクト『重訳』と東アジアの『近代』:1890～1910 における日中翻訳空間」(平成 22-24 年度、研究代表者・齋藤希史)の成果の一部をまとめたものである。この場を借りて研究助成に感謝申し上げたい。

.....
【著者紹介】:呉 燕(WU Yan)中国暨南大学文学部専任講師。学術振興会外国人研究員として東京大学総合文化研究科に在籍(2010.11～2012.11)。専門は翻訳論・近代日中間における翻訳と文学交流。

【注】

- 1 例えば、ゴーリキーの同時期の作品は1902年頃にはほぼ全部英訳されたにもかかわらず、この小説の英訳は、その中に含まれておらず、本稿で選んだ訳本以外の英訳本はいまだ確認できていない。
- 2 管見の限りゴーリキーの研究著作あるいは論文のなかで、『カインとアルテム』を選んで詳しく論じているものは稀である。言及している著作でも、概ねこの作品をゴーリキーの初期作品の「浮浪者」というテーマの流れの中に位置づけ、自然界の力の関係に繋ぐ一つの「浮浪者」類型として扱っているに過ぎない。Elizabeth Bowen, *Gorky Stories: Collected Impressions*, Alfred A. Knopf. 1950, pp.153. また Andrew Barratt, *The Early Fiction of Maksim Gorky: Six Essays in Interpretation*. Astra Press. 1993, pp.48.
- 3 少年期から極貧の生活を送ってきたゴーリキーは、16歳の時(1891年)、故郷ニージーニー・ノブゴロドで起きたポグロムを直接目撃するという衝撃的な経験をした。またその遊歴時代にユダヤ人家族と一緒に暮らしたというロシア人としては極めて珍しい体験をしていたため、後に生涯にわたってユダヤ人をひいきし、「ユダヤ人の生活研究のためのロシア人協会」の設立などさまざまなユダヤ人援助活動に携わっていたという。赤尾光春、「帝政末期におけるロシア作家のユダヤ人擁護活動——ソロウイヨフ、トルストイ、ゴーリキー、コロレンコを事例として——」、ロシア語ロシア文学研究 39号、2007年、46～47頁。
- 4 “しゃくどういろ【赤銅色】”、日本国語大辞典、ジャパンナレッジ(オンラインデータベース)、入手先<<http://www.jkn21.com>>, (2012-10-04)
- 5 ここの引用は、『明治翻訳文学全集(新聞雑誌編)・ツルゲーネフ集』に収録されている刻印版によるものである。川戸道昭など編集、「明治翻訳文学全集(新聞雑誌編)・ツルゲーネフ集」、大空社1996年、263頁。
- 6 Иван Сергеевич Тургенев, "Жид"(1846), http://az.lib.ru/t/turgenew_i_s/text_0048.shtml
- 7 ゴーリキー作、長谷川二葉亭訳、「猶太人の浮世」、『太陽』11巻4号、103頁
- 8 この部分の日本語訳は、樽本照雄氏の『呉禱の漢訳チャーホフ』(『清末小説』第33号、

2010.12. 1)から引用したものである。

- 9 原題は二葉亭四迷、「小説の題のつけ方」、『文章世界』第二卷十三号、明治四十年十一月。
- 10 「俳諧趣味」に関する部分は次の通りである。「外国の作家は一向題には注意せぬやうに思ふ。やはり平凡な題ばかりだ。中には一寸奇抜なものもあるが、日本人の題のやうに趣味を持たない。日本人と云っても俳諧趣味だな、題の趣味は。」
- 11 大槻文彦編、『言海:日本辞書』、1891 年版。日本国会図書館の近代デジタルライブラリーに所蔵される初版と明治四十四年館版本との間で、「うきよ」に関する語釈は変わっていない。
- 12 日本国会図書館の検索を使って「憂世」をタイトルに含むキーワードとして検索してみると、該当するのは4件のみであるが、「浮世」で検索すると238件が該当する。そのうち「文学」のジャンルが33件である。また、「浮世」は明治期の作文雑誌を通して立身出世することを目指して上京した書生たちの作品にもよく見られる表現であった。雑誌『中学世界』一卷六号(1898.12)の「臨時増刊 明治青年文壇」に収録された「晩秋」という作文には、「浮世を無常と観むもこの時ならむ」という表現が現れる。北川扶生子、『漱石の文法』、水声社二〇一二年、70 頁参照。「浮世」が翻訳で用いられたことは少ないが、管見の限り特筆すべきなのは、「猶太人の浮世」より少し前に出版されたジェームス・エー・フルード(James A. Froude)著、戸沢姑射(正保)訳注の『浮世の旅・英文訳注』(英学新報社、明治三六年五月)であり、この本に収録されている『浮世の旅』というエッセイの表題は、A Siding at a Railway Station という英語表題の改訳である。
- 13 明治三六年(1903 年)出版された『露和字彙』には、「бытия」存在;形勢;情態 古川常一郎増補訂正、『露和字彙』、東京大日本図書、明治三六年、53 頁
- 14 この二語は一年後に発表したゴーリキー原作の翻訳作品「ふさぎの蟲」にたいする評論である。『ふさぎの蟲』、『早稲田文学・彙報』、明治三九年四月。
- 15 いくつかの例が挙げられる。《庄子・刻意》:“其生若浮, 其死若休”。南朝诗人鲍照有《答客》诗:“浮生急驰电, 物道险铉丝。”三国阮籍《大人先生传》:“逍遥浮世, 与道俱成。”
- 16 例えば『浮世草子・日本永代蔵』一・一:「光陰は百代の過客浮世(フセイ)は夢覚といふ」
- 17 北京大学中国言語学研究中心言語学専用デジタル・コーパスである。
http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus/
- 18 例えば六朝期の『大悲蓮華経』に、次の文がみられる。「佛号阿[门众]如来。复有阎净世界。是中有佛号日藏如来。复有阎浮世界。是中有佛号日藏如来。复有世界名乐自在。是中有佛号乐自在音。」
- 19 付表に掲げた現代日本語訳本は、岡澤秀虎訳の「カインとアルテム」(「ゴーリキー全集・第三卷」、改造社昭和六年)である。

【参考文献】

- Barratt, Andrew. (1993). *The Early Fiction of Maksim Gorky: Six Essays in Interpretation*. Astra Press. pp48.
- Borras, F.M. (1967). *Maxim Gorky, the Writer: An Interpretation*. Oxford: Clarendon Press, pp. xiv.
- Bowen, Elizabeth. (1950). *Gorky Stories: Collected Impressions*. New York: Alfred A. Knopf. pp.153
- Livak, Leonid. (2010). *The Jewish Persona in the European Imagination: A Case of Russian Literature*. Redwood City: Stanford University Press. pp.10
- Maxim Gorki, (ed.Yarmolinsky & M. Budberg). (1939). *A Book of Short Stories*. New York: H. Holt & Co.
- 安藤厚(2000)「二葉亭四迷訳・ゴーリキー『猶太人の浮世』を読んで」『明治翻訳文学全集・新聞雑誌編・ゴーリキー集』(pp 426)大空社
- 赤尾光春 (2007)「帝政末期におけるロシア作家のユダヤ人擁護活動——ソロウイヨフ、トルストイ、ゴーリキー、コロレンコを事例として——」『ロシア語ロシア文学研究』39号:46-47.
- 古川常一郎 (1903)「増補訂正 露和字彙」(pp 53; 967) 東京大日本図書
- 『二葉亭四迷全集・第四巻』(1985) 筑摩書房 (pp 239)
- 大槻文彦編(1911)『言海:日本辞書』
- 北川扶生子(2012)『漱石の文法』(pp 70)水声社
- 樽本照雄 (2011)「吳禱の漢訳ゴーリキー(上)」『清末小説から』第 101 号.
- 樽本照雄 (2011)「吳禱の漢訳ゴーリキー(下)」『清末小説から』第 102 号.
- 清末小説研究会
- 日本国語大辞典、ジャパンナレッジ(オンラインデータベース)<http://www.jkn21.com> [Online]
- Иван Сергеевич Тургенев, "Жид"(1846) 、http://az.lib.ru/t/turgenew_i_s/text_0048.shtml [Online]
- ロシア語テキスト <http://www.fb2book.com/?kniga=40251&cht=1> [Online]
- 陳建華 (1998)『20世紀中俄文学关系』(pp 46-47) 上海学林出版社